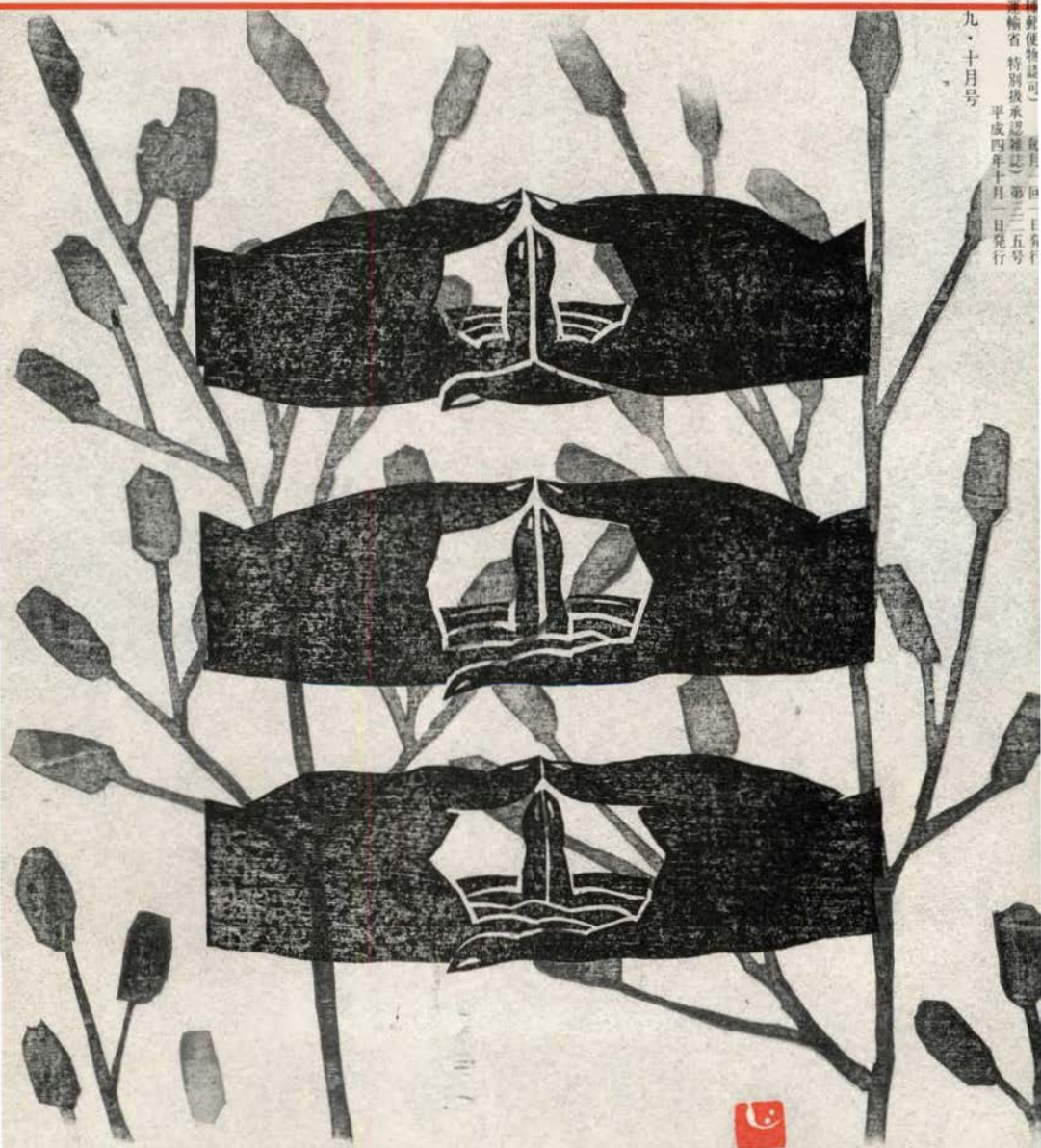


浄土

1992-9・10

昭和十年五月二十日 第三種郵便物認可
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 特別扱承認雑誌 第三十五号
平成四年九月二十五日印刷
第五十八卷
九・十月号





十月の秀句

秋天にわれがぐんぐんと
 秋天や峽をたのみて峽に生く
 秋天を開いて塔の建ちにけり

高浜 虚子
 加藤 楸邨
 中川 宋淵

Ⅲ 九・十月号 Ⅲ



念仏申すにはまたく別の様なし。
ただ申せば極樂へむまると知て、
心をいたして申せばまいる也。

——『つねに仰せられける御詞』

===== 目 次 =====

＝ 連 載 ＝

生も死も悦べる世界(完)……………須 藤 隆 仙……(2)

にこにこ法話

お塔婆ってなあに……………長谷川 岱 潤……(10)

“維持会員”へのご加入のお願い……………(9)

季語やぶにらみ 27

梅 雨

……………木 下 隆 一 ……(25)

◇◇心のしらべ・生活のうた⑧◇◇

“百人一首”〔三〕……………細 田 隆 善……(17)

————— 表紙絵 小林治郎画 —————

連載

生も死も悦べる世界(完)



須^す

藤^{どう}

隆^{りゅう}

仙^{せん}

(函館市称名寺住職)

悦びの生活

前回は、極楽浄土こそ宇宙そのもの、大自然そのものであるということの説明を申し上げましたが、それについて今少しお話いたしますと、『阿弥陀経』にはその浄土の存在を、『是れより西方十万億の仏土を過ぎて世界あり。名づけて極楽という』と説かれて、それは西の方の遠い遠い、とてつもない遠い所にあるのですといっておられるのですが、一方、『観無量寿経』には、「此^こを去^さること遠からず」と説いておられるのです。

一方では遠い遠い国といい、他方ではすぐそこにある近い国といっておられる、いったいこの矛盾はどうしたことでありましょうか。ところが、前回ご説明申し上げたような理

が解りますと、それは矛盾でも何でもないであります。ごく当たり前の、何ら不思議のないご説明なのであります。それは前に申しましたとおり、お浄土は自然そのもの、大宇宙そのものだからであります。大自然、大宇宙でありますから、遠いといえば遠いし、近いといえば近いのであります。永遠の彼方も大自然であれば、すぐそのそばも大自然であります。私の家の中も宇宙の一部ですが、光が届くのに何年もかかるという遠い遠い星もまた宇宙の一部であります。こう考えてきますと、『阿弥陀経』、『観無量寿経』に説かれてあることは何も矛盾したことではありません。真の理をおっしゃっておられるのでありまして、さすが仏教というものは、真理を説いたものであるということが、つくづくと解らせて頂けるのであります。

でも、次にもう一つ疑問が出てまいります。極楽浄土が自然そのもの宇宙そのものであったならば、我々はだまっけてもその自然・宇宙の中にいるのだから、念仏する必要もないし、彼の国に生まれようとする必要などもないのではないか、とこういうことではありません。

さあ、そこです。確かに一つの理屈からいえば全くその通りであります。しかし、ここところが大切なのです。

仏法を聞き、念仏を称えさせて頂くからこそ、私たちはその自然・宇宙を極楽である、

帰るべき故郷であると認識させて頂けたのではないでしょうか。つまり信心というものがそうさせてくれた、信心とか宗教とかいうことは、前回申しましたように、「認識」の世界であります。これまで全く気のつかなかったことに気づかせて頂く、認識させて頂く、それが信心というもの、宗教というものであります。しかも西欧の学者がいみじくも「無限への認識」といわれたように、無限の世界を認識させて頂く、それは即ち無量寿・無量光の世界、阿弥陀如来のお浄土の世界であります。

お念仏を称えたと、自然が、宇宙が、お浄土になつてしまふ。そこが絶対楽の世界であるということも、帰るべき故郷であるということも、お念仏することによつてみな分かつてしまふ。逆にいうとお念仏しないと分かりません。認識されません。

お念仏することによつて分かるのですから、お念仏こそが大切なわけであり、分かつた心（彼の国を求むる心）が大切なわけでありまして、もしお念仏しなかつたら、自然はただの自然、宇宙もただの宇宙、帰るべきところでも何でもないわけであります。ちょうど、家もない浮浪の人たちには希望がないように、人生の故郷を知らない人には希望が出てきません。先輩は信仰は進行だと教えられましたが、正にそのとおりで、お念仏することによつて帰るべき故郷を知った人間となり得る、そこに人生の意義が出てくる、ですからお念仏が必要なわけであります。

なれない”とこう誓われた。その御願であります。これは実は、お念仏することによって、すべてが極楽と化するという、そのことを示されているのです。四十八願の根本はここに
あるのです。そのための手がかりとして大切なお念仏を説いた願、十八目番の願ですが、
これがないことが成就されませんからこれを最も大切な願、王本願としていますが、実
は四十八願全体の眼目は第一にパーンとお出しになられた。お念仏によって地獄も何もみ
な無くして、極楽だけにして、それが無三惡趣の願であり、四十八願の根本であります。
だから第一にもってこれたのです。

そんなわけで、生きている間は、この愚凡の私でも人様を利する力にならしてもらえ
るという尊いお念仏を称え、そのお力によって宇宙こそ極楽であると知らせる頂いて、懸命
に懸命に、明るく明るく、大羽ばたきに羽ばたいて、そして心をしっかりもち、体を大切
にして、寿命が尽きたら、水と花と光の世界を通過して、一遍にパツと宇宙の極楽、宇宙
そのものの極楽、大自然そのものの極楽に帰らせて頂くのです。こんな有難いことはあり
ませんが、お念仏の教えでは、その上また、極楽宇宙の次元から、残っている人たちを護
り助ける力となって還照することができるといふ、ああ、ここに私たちは何の心配があり
ましょうか、何の大変さがありますでしょうか。心配も心配でなくなり、大変も大変でなくな
ってしまいます。正に法然上人の「悦びの中の悦びなり」の世界であります。

とはいっても、生身の体をもっている、生存活動の苦難はつきものであります。それがまた自然の原理でもあります。何で原理として苦難があるのか、そのところも説明したいのですが、とても時間ありませんので省かせて頂きますが、その苦難を乗り越えるには、法然上人は、一つのことに頑かたなにとらわれずに、念仏の称え易いような生活を目標にしないと教えられているのであります。もう皆さんすでによく知っておられるお言葉ですが、次の通りにお示し下されてあるのです。

「現世を過ぐべき様ようは、念仏の申されん様に過ぐべし。念仏のさまたげになりぬべくば、何なりともよろずを厭いとい捨てて、これを止とどむべし。曰いわく。聖ひじりで申されずば妻めを設けて申すべし。妻を設けて申されずば聖にて申すべし。住所にて申されずば流行して申すべし。流行して申されずば家にいて申すべし。自力の衣食にて申されずば他人に助けられて申すべし。他人に助けられて申されずば自力の衣食にて申すべし。一人して申されずば同朋と共に申すべし。共行して申されずば一人こもり居て申すべし」

何という寛大な、大慈悲あふれるみ教えでありますか。こういうことを教えている宗教はあるではありませんか。何をやってもよいというのであります。ただし念仏を申すことだけは絶対条件であります。そのためには何をやってもよいというのであります。そうなると却って馬鹿なこと、悪いことなどできるものではありません。ただただ如来様に

感謝し、お釈迦様、善導大師、法然上人、その他、み教えを遺された高僧の方々に合掌いたし上げて、法然上人のみ教えをキツチリと守って、お念仏をさせて頂くのみでございませう。法然上人はまた「生^いけらば念仏の功つもり、死なば浄土へ参りなん。とてもかくても此の身には、思いわずらう事ぞなき」(常に仰せられける御詞)と仰せられました。

拝読する度に、もう言葉が尽きてしまいます。これで何も言うことはございません。右のお言葉が浄土宗の大安心・大起行であります。信仰と実践とであります。生のことも、死のことも、この短いお言葉の中に全部こめられております。仏教の最終目的は生死解脱^{げだつ}というのですが、これがもうここでは全部解決されている、お念仏こそ正に生死解脱の教えなのであります。

いよいよペンをおきますが、このようなお念仏ですから、人間はみな最後にはこれを称えます。その例膨大にあります、ここに一、二だけ。佐藤愛子さんのお父さん佐藤紅緑^{こうろく}さん(サトウハチローの父でもある)は、ふだん全く無信心の方だったそうですが、亡くなる時突然床の上に上体を起こして「南無阿弥陀仏」と大声で念仏を称え、周囲の人たちをびっくりさせたそうです。もとの明治神宮名譽宮司甘露寺受長氏^{かんろじうぢやう}は、お念仏を称えると一ばん心が休まるといっておられました。また、わが国宗教界の大御所N博士は、毎日、阿弥陀如来様を拝んでおられるというのです。ただにく、有難いことであります。(終り)

◎「維持会員」へのご加入のお願い

法然上人鑽仰会は月刊誌『浄土』を刊行しながら、法然上人の教えを宣揚し、念仏信仰の実践をしてまいりました。現在、『浄土』誌は五十八巻を刊行し、鑽仰会創立以来の熱意を盛り返したく努力しています。しかし弊会の活動は、『浄土』誌の刊行が唯一の務めというように、まことに細々とした微力な努力に終始している状態です。しかも雑誌の発行自体も不手際や遺漏の多い作業で、愛読して頂いております会員諸兄には、まことに申し訳ないかぎりであります。しかしともかくも『浄土』の灯を消すことなく、遅々とした歩みではございますが、今後とも一步一步前進してまいりたく、担当のもの、一層の精進を続けたいと思っています。

つきましては、「年会費 金二万円」のご助成をもって、弊会の維持会員として月刊『浄土』刊行に暖かいご支援を賜わりたく、とりわけ、合併号を出さざるを得ない弊会の窮状をお察しの上、重ねて心よりお願い申し上げます。

法然上人鑽仰会

お塔婆つてなあに



長谷川 岱潤

(東京・品川区戒法寺住職)

ミーちゃんが学校から帰ってくると、

お父さんは本堂の前にお塔婆を出して
いました。

「ただいま、何してるの」

「お帰り、昨日のお塔婆さ。昨日は雨で
ご法事のお塔婆立てられなかったでしょ。

だから立てて上げようと思って。ミーち
ゃん手伝ってくれよ」

「やだ、そんなに重いのもてないわよ」

「運ぶのは父さんがするからさ、お墓で
立ててくれればいいのさ」

「そお、じゃあ、手伝ってあげるか」

「サンキュウ。それじゃ三島さんから
こうか」

お父さんはお塔婆を担ぎ、ミーちゃんは
その後ろからついてゆきました。

「さあここだ。後はミーちゃんにお願い
よるよ」

「ちよつと待つて、お父さん。このお墓
もうお塔婆いっぱいよ」

「本当だ、これじゃ立たないねえ。少し
抜くか」

「ミーちゃんも手伝うわよ」

「古いお塔婆は、刺に気をつけなさい」

「痛い。それ早く言つて」

「もうやったか。どれどれ、大丈夫だこ
れくらい、ほら抜けた」

「ああ、痛い。ねえ、どうしてお塔婆つ
て立てるの」

「おお、突然にきたね」

「だって、こんなにたくさん、法事のだ
びごとに一人一人が立てるなんて、どう

してかなつて思うの」

「ウーン、いい質問だね。お父さんうな
つてしまふよ」

「お塔婆つて本当は何て言うの」

「正式には、ソトウバつて言つてね、卒
業の卒という字に塔婆つて書いたり、ま
たは率に、東京都の都に、お婆さんの婆
つて書いたりしているんだよ」

「変なの、率都婆なんて書くの」

「そうだよ。つまり漢字にはまったく意
味が無いということだよ。ソトウバつ
て言う発音の言葉に、漢字をあてたとい
うことなんだよ」

「ソトウバつて、どこの言葉なの」

「もちろんお釈迦様のふるさとインドさ。
インドのストゥーバつて言葉が、ソトウ

バの語源なんだよ」

「ずいぶん違うんじゃない」

「そんなことないさ、ストゥーパって何度も言っごらん」

「ストゥーパ、ストゥーパ、ストゥーパ……ちつともソトウバにならないよ」

「そうかい、お父さんがやるとすぐなるけどなあ。ストゥーパ、ソトウバ。ほら、もうなっちゃた」

「それ無理やりじゃない」

「中国の人が、漢字に当てはめる時の苦労を思うと、これでいいの」

「ふうん、まあいいや、それでそのストゥーパって何、どんな意味なの」

「ストゥーパはね、お釈迦様が亡くなられた時に、ご遺体を火葬にして、そのご

遺骨を八つの王国に分けたんだよね。それを受け取ったそれぞれの王様は土饅頭のようなお墓を作り、その上に日傘のような形の建物を建てたんだよ。そのお墓のことをストゥーパって言ったんだよ。

そして、お釈迦様が亡くなられてから二〇〇年後、インド全土をアシヨカ王という方が征服し、マウリヤ王朝全盛の時に、アシヨカ王は八つの塔からお釈迦様のご遺骨を出して、インド全土に八万四千の塔を建てて、遺骨や所持品、遺髪などを埋めた上に、煉瓦で塔を建てたんだね。その時土饅頭は一重から二重三重、五重というふうになっていって、その建物の形で、お釈迦様の教えを表そうとしたんだね。それを全てストゥーパって言って

いるんだね」

「お釈迦様のお墓のことだったの」

「その後、その塔を中心に仏教運動が各地で起きて、塔を建てることが重要な意味を持つようになり、供養することを意味するようになっていったんだよね。そして中国や日本に伝わって建てられたのが、『五重の塔』ということになるんだよ。だから各自が、供養のために『五重の塔』を建てるのがいいんだよ」

「まさか、そんなことできるわけないじゃない」

「だから、お塔婆をあげるんだよ。ほら、よくお塔婆を見てごらん。上の方が四つくびれているでしょ」

「あ、本当だ」

「つまり五つの部分からできているってことでしょ。だからこれは五重の塔なんだよ」

「へえ、でもさ、供養って言うけど、どいう意味があるの」

「またまた、鋭いことを言うね。この塔を建てる信仰の意味とか、それこそ五重の意味とかになると、大学の授業になっちゃってしまつて、とても難しい話になつてしまふから、もっと大きくなつてから自分で勉強しなさい。ただし、今のミーちゃんに解ってもらえるように、お塔婆って何なのかについて話せば、それは、私たちがお浄土に行かれた亡くなられた方に出すお手紙だと思えばいいと思うよ」

「お手紙。お塔婆ってお手紙なの」

「そう、お手紙ってどうなっている？まず、あて先を書いて、そして差し出し人自身の名前を書いて、そして本文があつて、後書きがあつて、出した日にちがあつて、そして切手を貼つて出すとあて先につくんだよね」

「そうそう、おばあちゃんところに出した」

「それをお塔婆で見ると、まず、このお塔婆なら、上から南無阿弥陀仏、照栄浄円信女七回忌追善菩提の為と読んで、一番下の三島教子となっているでしょ。

差し出し人は三島教子さんだね。あて先は照栄浄円信女さん。亡き方はお浄土にいらつしやるから、ちゃんと戒名で出さないとだめだね」

「なるほど」

「本文が、七回忌追善菩提だよ。七回忌に際し、菩提を追善供養しますってこと」

「なあに、全然わからない」

「お浄土でどうぞ成仏して下さいとか、安らかに過ごして下さいということを、私たちがこの世で供養して祈りますっていうこと」

「一番上の南無阿弥陀仏はなあに」

「お浄土は誰の世界だい」

「阿弥陀様」

「そうだね、その阿弥陀様をお願いするんだから、これは切手だね。お浄土に出すお手紙は六十二円の切手を貼つてもつかないけれども、阿弥陀様にお願ひすれば必ず届けてくれるのさ」

「裏はどうなっているの」

「入一法句、平成四年九月二十日って書いてあるでしょ。出した日にち、そして入一法句っていうのはね、後書きと考えていいと思うよ。たくさんの意味を込めている言葉なんだけれども、要するに阿弥陀様のことを私は信仰します。阿弥陀様の教えを守り、そのお徳を賛えますっていう私たちの心を、阿弥陀様によろしくということで書き添えているんだね」

「なるほど、それじゃみんな出したくなるわよね」

「でもね、お父さんは最近お塔婆を立てなくちゃだめですなんてと言ひ方はしたくないんだ」

「どうして、お塔婆を立てるっていいこ

となんでしょ」

「そうだよ、だから立てたいとおっしゃる方を拒むことはできないよ。でも積極的には勧めたくないんだ。だってこの木材の消費はすごいものがあるからさ」

「森林破壊になっているの」

「いや、お塔婆に使用する木材はモミで、建築用には適さないものを、植林した人工林からの計画的な伐採だから、森林破壊にはなっていないという報告書も見ただけれど、まあ割り箸と一緒に、大量消費を煽るのはよくないように思うのさ」

「なんかむずかしいけど、お父さんのいようにしたら」

「ハイハイ、そうします」

ミーちゃんが大人に見えた午後でした。

◆◆◆好評の新刊◆◆◆

教訓仏教語辞典

栗田順一編 価格一六〇〇円

○仏の教えはいつも新しい！

日常用語として使っている仏教語も、その意味をよく理解してみると、私たちの暮らしに密着した教えが多い。本書はなじみ深い仏教語の意味を生活に密着したかたちでわかりやすく説いている。

〈出版・発行〉

東京堂出版 東京都千代田区神田錦町三―七 電話（〇三）三三三三―三七四一

*浄土宗出版室において特価で販売しています。

お申し込みは浄土宗出版室 電話（〇三）三四三六―三三五一まで。

心のしらべ・生活のうた(八)

世界に秀でた「愛」の詩集 ボエム

“百人一首” 〔三〕

細田隆善 (俳号豊明)

③あしびきの山鳥やまどりの尾のしだり尾の

ながながし夜をひとりかも寝む

かきのもとひとまろ
柿本人麻呂

万葉集の代表歌人、歌聖とまで称賛された柿本人麻呂の歌である。

やまどり
山鳥は雌雄別々に離れて寝るといわれていた。この山鳥の雄おすのように妻とも恋人とも離れて男一人、長い寒い夜を寝ていることの侘びしさを嘆いた哀愁の歌である。

「あしびき」は山にかかる枕詞、尾は山鳥の雄の長い尾の意味と男性の意味をかねている。「しだりを」長く垂れている山鳥の尾のこと、「ながながし」は長いこと、「ひとりかもねむ」は独り寝の悲嘆を表現した意味である。

山鳥は雉きにいた鳥であるが、雄は雉の雄と同じように尾が長い。しかし色彩は雉ほど鮮明ではない。山鳥は雉と同様日本固有の鳥であつて本州、九州、四国に棲み島々には棲んでいない。山鳥は繁殖期には雌雄ともに棲息するが、平常は雌雄別々に棲んでいるから、このような歌が詠まれたのである。女性を慕う男性の心情を、山鳥に托した人麻呂の愛の賛歌を、定家は百人一首の第三番目に掲げた

のである。

人麻呂は歌聖と称せられた大歌人である。その主な作品は持統三年（六八九）から文武四年（七〇〇）に至る間に作られ、宮中に係る挽歌げんかが天皇行事に供奉くぶした歌が多いので、歌をもつて仕えた宮廷歌人であるといわれた。人麻呂作と明記された歌は万葉集に長歌十六首、短歌六十一首あり、柿本人麻呂歌集には長歌、短歌合わせて三百七十首もあつて、万葉集最大の歌人といわれた。かつその作風は雄渾壯莊重にしてかつ華麗修辭にして、日本詩歌史上特筆すべき歌人であつた。

—— 万葉集卷三 ——

大君おおきみは神にしませば天雲あまくもの

雷いかづちの上にいほりせるかも



— 柿本人麻呂像 —
(奈良・長谷寺藏)

(柿本人麻呂)

天皇が雷山に行幸せられたとき、大君は神であるので、雲のかかった雷の上に飯宮を建てておられるという持統天皇の吉野行きの際、王権の威大さを称した作品である。

この万葉の大歌人が生没不詳、経歴も定かでない。生れたのは推定すると斉明六年（六六〇）庚申こうしんの年といわれている。そのため人麻呂の別名は猿さる、佐留さるともいわれた。その年は渡唐の学者であり、万葉の歌人である山上憶良やまのうえのおくらも出生している。万葉集の原形である巻一、巻二の編集者は山上憶良ともいわれている。人麻呂の出生地は大和、石見いづみ（島根県）など定かでない。

人麻呂は姓かばねは臣おみであつたが、天武十三年（六八四）の改姓によって朝臣あそみになつたという。そのため万葉集には、柿本人麻呂と記してある。天皇行幸に供奉するほどの宮廷歌人でありながら官位は低く、歿したときは従四位下であつたという。

人麻呂の長歌はすばらしく万葉集には十六首があるが、とくに壬申じんしんの乱に活躍した高市皇子たけちのみこ（天武天皇の長子）に捧げた挽歌ばんかは、日本文学史上特筆すべき長歌である。その一部。

——万葉集卷二——

……皇子みこながら任けたまへば（お任せになると）大御身おみみに太刀取り佩はかし大御手おみでに弓取り持たし御軍士みいくさをあども

ひ（いざなう）たまひ整ふる鼓の音
は雷の声と聞くまで吹き鳴せる小角

（笛）の音もあたまたる（敵対する）

虎が吼ゆると諸人のおびゆるまでにさ
さげたる旗（赤旗使用）のなびきは冬
ごもり春さりくれば野ごとにつきてあ
る火の（野焼きの火）風のむた（とも
に）なびかふごとく取り持てる弓弭の
騒ぎみ雪降る冬の林につむじかもし巻
き渡ると思ふまで聞きの恐く引き放
つ矢のしげく大雪の乱れて来れまっ
ろはず（徒がわず）立ち向かひしも露
霜の消なば消ぬべく……略

この長歌は人麻呂三十六歳、持統十年（六
九六）の作品である。

人麻呂は愛妻家であった。先きの妻の

死に對して長歌短歌がある。人麻呂四十
一歳、大宝六年（七〇一）である。

——万葉集卷二——

去年見てし秋の月夜は照らせども

相見し妹はいや年離る（人麻呂）

昨年見た月は今年も照っているが、一
緒にこの月を見た妻は亡くなり、ますま
す年月が遠のいていくとして、妻の死に
對し泣血哀慟して歌を作ったとある。

人麻呂四十八歳の和銅元年（七〇八）

石見国に居て臨終のときの一首がある。

——万葉集卷二——

鴨山の岩根しまける我をかも

知らにと妹が待ちつつあらむ

（人麻呂）

鴨山の岩を枕にして横たわっているが、

わたしのことを知らずに妻は待つてゐることであろうとの歌である。その年四月二十日没したと続日本紀は伝える。また慶安四年四月（七〇七）の病死ともいわれている。

人麻呂は歌聖として神に祀られた。明石市（兵庫県）の柿本神社の祭神、柿本大明神は人麻呂である。人麻呂の歌聖としての信仰は各地に定着した。当社の人麻呂由来は定かではない。もとは人麻呂の木像を奉安したという。また益田市（島根県）にも柿本神社があり、人麻呂終焉の旧跡であるともいわれている。また浜田市（島根県）亀山城跡の秋葉神社に人麻呂が祀られていてここが終焉の地ともいわれている（鴨山が亀山に変わった）。

人麻呂の最後は逮捕、投獄、処刑されたともいわれている。その時代は壬申の乱、律令^{りつりょう}国家体制の確立、皇位継承問題、豪族の相剋等々の問題がからみ、官位は低いが火中の人となった。とくに「いろは」歌の作者であらうといわれている。いろは歌は弘法大師（七七四～八三五）の作とは今はいわれていない。いろは歌の最古本は承暦三年（一〇七九）の金光^{こんこう}明^み最勝^{みょうさう}王^{おう}経^{きやう}音義^{おんぎ}の巻頭に万葉仮名で書かれている。これはいろは歌が万葉時代には万葉仮名で流布し、平安時代に仮名文字ができて平仮名、片仮名、の文字となった。万葉仮名のいろは歌は七字七行に区切って書かれている。

いろはにほへと
ちりぬるをわか
よたれそつねな
らむうるのおく
やまけふこえて
あさきゆめみし
ゑひもせす

最後の行一字を読むと「とかなくてし
す」すなわち「咎^{とが}なくて死す」と冤罪^{えんざい}に
対する無実の叫びを訴えているといわれ
ている。このためか人麻呂の生涯の最後
のところが明らかでない。

今年八月、東京において奈良長谷寺^{はせでら}の
名宝展が開催された。この名宝展の中に
柿本人麻呂の木造^ぎが展示されていた。人

麻呂の肖像画は多いが彫刻は珍らしい。
高さ十六センチメートルの木造、箱書き
によって、文化十年（一八一四）六月、
京都の仏師清水隆慶の作品である。その
姿は歌道にいそしんだ藤原兼房が夢に現
れたという人麻呂を彫刻したといわれて
いる。長谷寺の創建当初と人麻呂と縁り
があつたといわれもしているが明らかで
ない。兼房は鎌倉時代の内大臣、左政大
臣、関白となり、和歌を好み人麻呂を尊
敬し、夢の姿を画工に描いたといい、建
保五年（一二一七）没している。この人
麻呂の像は歌にいそしむ歌聖を写實的に
表現している点がとくにすばらしい。

（つづく）

◎『浄土』表紙版画絵販売についての「案内」

『浄土』九・十月号合併号をここにお届けいたします。

どうか、『浄土』誌の充実と継続のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、格調高い小林治郎先生の作品を頂戴しております。小林先生のご厚意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただいております。また木製の高級額縁代も含めて、金二五〇〇〇円というお求めやすいお値段で、季節感に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えば幸いです。

また、大きさの方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20cm×30cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30cm×50cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、昨年度及び一昨年度の版画絵も、正月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふるってご注文願えば幸いです。

(申し込み先) 〒103 東京都千代田区飯田橋一―一六

法然上人鑽仰会 振替(東京) 八―八二二八七

季語やぶにらみ (三)

梅雨

平成四年の梅雨は、関東・東海地方では六月七日に梅雨入りし、七月二〇日に梅雨明けした。この地方だけに限って言えば、気象庁が毎月定期的に発表する長期予報（三カ月予報）の三月発表分「今年の梅雨入りは例年より幾分早く、梅雨寒の日が続く、梅雨明けは例年より遅れて七月二〇日以降になる模様」

木^{きの}
下^{した}
隆^{りゅう}
一^{いち}
(随筆家)

に、ほぼ合致している。お見事と褒めたいところだが、実際に梅雨が明けたのは七月一日であった。

（気象庁は七月二〇日という日付けにかなりこだわったな。本当は予報通り、二〇日以降に梅雨明け宣言をしたかったのではないかと、私は思った。というのは、五年前だ

ったか三度も梅雨明けを発表する醜態を演じ、顰蹙を買ったことがあるからである。あれ以来気象庁は梅雨明けの発表には慎重になり過ぎ、毎年菌切れが悪いのである。あの年は特異な気象状況で、一旦北上して消滅した梅雨前線が忽然とシベリアに現れ、急速に南下して雨を降らせる、いわゆる戻り梅雨現象を繰り返したのであるが、この現象は局地的には大なり小なり毎年起こっている。現に、今年は鹿児島地方にこの現象は顕著で、梅雨明けが出された後、何度も豪雨に見舞われているのである。地元の気象台がどんな言い訳をしているか興味があるが、その反面、梅雨明け宣言が二、三日ずれようが、戻り梅雨が何度あろうが、めくじら立てるほどのことではないじゃないかという気持ちがないでもない。

七月一八日はたまたま土曜日であった。土曜閉庁の気象庁では梅雨明けを発表しようにも、それを担当する主席予報官（このような職種があるかないかは知る限りではない）が休みで、発表できなかっただけかもしれないし、詳細な天気図上のどこかに、発表を躊躇させるデータが潜んでいたのかもしれないからである。

先月号の原稿を送ってから、その末尾で公言した手前、「季語やぶにらみ」というタイトルにふさわしいテーマを探し続けていた。いくつかの季語が候補にあがったが、どれももう一つ気分が乗らぬ。そんな時、娘のところへ英語の勉強に来ている中学生に、「梅雨」と「五月雨」の違いについて質問された。全く虚を突かれた格好だった。物心ついてこの

方、この季節に「つゆ」という長雨が降るのは当たり前で、何の不思議もなく、むしろ、雨が降らないことのほうが問題だった。文学的に「さみだれ」という語についても、陰暦五月に降る雨イコール「つゆ」という説明で納得し、格別な定義づけなどは必要なかった。しかし、正面きって聞かれるとそうも言っていられず、

「梅雨というのは六月から七月にかけての雨期を指す言葉。五月雨（さみだれ・さつきあめ）は梅雨と大体同じ意味を持つが、このほうは主として雨そのものを言う」

と答えたものの、あまり自信はなかった。

「梅雨の読みは『つゆ』の他に『ばいう』、梅の実を熟れさせる雨、梅の実が熟れるころ降る雨の意で、またこのころは湿気が多くカ

ビが生え易いので、^か黴の雨と書いて『ばいう』、いずれも俳句の季語になっている。芭蕉の時代には、まだ梅雨という熟語は生まれていなかったらしく、専ら『梅の雨』というのが使われている。芭蕉にも『降雨や耳もすふ成梅の雨』という句があるが、この季語は衰えて顧みられなくなってしまった。『梅の雨』がいつごろ『ばいう』または『つゆ』に取って替られたのかは明らかでないが、『つゆ』が季語として確立したのは意外に新しく、大正時代半ばごろと推定されている。だから、正岡子規に、「五月雨や上野の山も見飽きたり」と『さみだれ』の句はあっても、『梅雨』を詠んだ句、少なくとも人口に膾炙した句は見当たらない。尤も彼の全句に当たった訳ではないから断定はできないが……。今日私が君

に答えられるのはこの辺までだな、もっと知りたいというのなら調べてみてもいいが……」

と言うと、少年はメモを取る手を止めて、「お願いします」とペコンと頭を下げた。

一言余計だったかなと、少年との約束を後悔したのは、梅雨明け以後の連日の猛暑に、心気朦朧氣息奄々の日々を余儀なくされたためであった。しかし、「梅雨」を今月号のテーマにしようと思いついたのもこの時であった。少年との約束も果たせるし、一挙兩得ではないかと思つたのである。だがこの考えは安易に過ぎた。梅雨のメカニズムを説明するには岩波書店の「科学の事典」では専門用語が煩雑で、私の乏しい知識でこれの一つ一つ咀嚼すれば、説明するまでに優に数カ月は要す

るであろうと思われたので、用語の解説を参考にするにとどめざるを得なかった。結局頼りにしたのは小学館版「日本百科大事典」の根本順吉氏の解説であった。以下はその要約である。梅雨（ばいう）Ⅱ夏至（六月二二日前後）を中心とした約四〇日間の雨期を言う。これが顕著に現れるのは中国の揚子江流域、朝鮮半島南部及び日本の本州・四国・九州で、北海道ではあまりはつきりした雨期を示さないことが多い。国際的にも「Bai-u」と呼ばれる特殊な雨期である。昔は「さみだれ」などとも呼んでいたが、今日では雅語となつてしまい、むしろ一般的には「つゆ」と呼んでいる。

梅雨入りや梅雨明けの日付けをはつきりと指定することは困難で、年によりまた場所に

よつてその経過は異なっている。梅雨期全体は「走り梅雨」「梅雨前期」「梅雨後期」の凡そ三つに区分して考えることができ、前二者の間には「梅雨晴」の一時期があり、後二者の間にはすでに真夏の兆しを示す「梅雨の中休み」がある。この経過は最も典型的な場合であつて、中休み期間が長引いて前後の時期に食い込むと、いわゆる「空梅雨」になる。

梅雨期の降り方は前期と後期で特徴があり、前期の雨量は多くはないがしとしとと連続した長雨であり、後期は夏の俄雨のような一時的な強い雨を伴うことが多く、これに台風などが加わると、局地的な集中豪雨になることが少なくない。また、雷雨は期間中から次第に回数が増し、「雷が鳴ると梅雨明けになる」という古来からの言い伝えが統計的に正しい

ことを示している。なお、梅雨期の天候を我々は天気図で知ることができるが、その特徴は第一にオホーツク海や日本海方面にかなり優勢な高気圧があること、第二に日本の南方洋上の高気圧が、夏季のように日本全土を覆うほど強くないこと、第三に北の高気圧と南の高気圧の間には前線、いわゆる「梅雨前線」が停滞し、この前線上を低気圧が次々に周期的に東進する、の三点で、これが梅雨の原因となる気圧配置である。

長々と引用したが、要するに北の冷たい高気圧と、南の温かい湿った高気圧が押しくらげ頭をして、その軋轢で生じた梅雨前線が日本上空で一進一退を繰り返す状態が梅雨なのだ、「梅雨寒」という現象も、北の高気圧が押し勝った結果と考えれば納得がいく。しか

し、なぜ前線上に低気圧が現れるのか、その辺の説明がないのでいま一つ合点がいかが、現実的にはその通りなのだから、ひとまず置いておく。

梅雨関連の季語を挙げると、僅か四〇日ほどの間のものとしては他に例を見ないほど多く、いかに梅雨というものが日本人の生活に深く関わっているかが分かうというものである。なお、(一)内は傍題、例句は私好みの句であることをお断りしておく。

梅雨つゆ(梅雨ばいう・霽雨ばいう・ついで・梅霖ばいりん・梅の雨・荒梅雨・梅雨前線など)

梅雨の犬で氏も素性もなかりけり 安住敦
五月雨さみだれ(五月雨さつき・さみだるる・さみだれ雲・さみだれ傘など)

五月雨や月夜に似たる沼明り 小川芋銭

走り梅雨(前梅雨・梅雨の走り・迎え梅雨)

書架の書の一つ逆しま走り梅雨 林 翔

入梅(梅雨に入る・梅雨入つゆいりなど)

焚火してもてなされたるついでりかな 白雄

梅雨寒(梅雨寒し・梅雨冷)

梅雨空(梅天・五月空さつき)

梅雨の月

梅雨の月雲脱ぎ捨て、なほ淡し

西谷しづ子

梅雨の星

むささびや杉にとまれる梅雨の星

水原秋桜子

黒南風くろはえ(荒南風)

白南風

白南風や虫喰米を棄て切れず 殿村菟絲子

青梅雨

青梅雨や幾千の鷺子を守る

島村 元

空梅雨（涸梅雨・旱梅雨）

子育ての修羅にある嫁旱梅雨

向笠和子

梅雨曇（ついたりぐもり・梅雨雲）

梅雨晴（梅雨晴間・梅雨の晴・五月晴など）

建てましのそこだけ夕日梅雨晴る、

永井東門居

出水（夏出水・梅雨出水・出水川など）

梅雨の蝶

梅雨の蝶人の計いつもひらりと来

鈴木栄子

梅雨茸（梅雨菌・梅雨の茸）

梅雨明（梅雨あがる・梅雨の後・梅雨の果て）

送り梅雨（戻り梅雨・返り梅雨）

黴（青黴・黒黴・黴の宿・黴煙・黴の花など）

本尊の螺髪もつとも黴び在す

一田牛畝

この他、五月富士、五月川、五月波、墜栗花穴、梅雨鯰、梅雨かいず等が歳時記に載っているが、井水増す、川止め、紫陽花、花菖蒲等も、広い意味で梅雨関連の季語と考えて差し支えないかと思う。空梅雨は困るが、降り続くと山崩れや洪水などの災害を招く。

「墜栗花穴」は「梅雨穴」とも言い、地盤がゆるみ、水を噴き上げたりする穴を言うが、季語として定着しているところを見ると、危険を戒める意を含んでいたであろう。現代の穴は都会に多い。マンホールの蓋がはずれているのに気付かず、時々子供が吸い込まれたりする。

それにしても、今年は戻り梅雨は無いのであるうか。今日も朝から伊豆の山野には、研ぎ澄まされた日矢が用捨なく降り注いでいる。

◇ ◇ ◇ 新購読会員のご紹介を ◇ ◇ ◇

月刊紙『浄土』の刊行、なんとか続けているという現状です。編集にも遺漏が多く、また校正のミスも相変わらずです。出版印刷をお願いしている方々にも、きびしい業界の昨今のありようの中で、ともかく懸命のご配慮をいただいております。わずかの人数での雑誌出版、発送をめぐるさまざまな営み、ともかく『浄土』の灯を消すことなく、法然上人鑽仰会の六十年にならんとする歩みを止めることはありません。失敗や不手際の多いことながら一歩一歩の歩みを今後も少しずつ進まなければなりません。

会員読者諸兄にご迷惑をおかけすることも決して少ないことではなく、この上なにかをお願いもできにくいことではありますが、どうぞ今後とも暖かいご助成、ご支援を切にお願い申し上げます。一ページ、ポッカリあいた埋め草として、心よりの謝意にあわせて、臆面もないお願いを記させていただきます。

法然上人鑽仰会

◎読者の皆様へのお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努めています。新しい読者を広くご紹介下さい。また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふってご投稿下さい。誌面充実のために、くれぐれも宜しくご協力下さい。

- 一、内容 自由（生活の一コマや信仰的な感想あるいは思うことなどをエッセイ風におまとめ下さい。）
- 一、枚数 四百字詰用紙六～十枚程度
- 一、締切 毎月末日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 五十八巻 九・十月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

平成四年九月二十五日 印刷

平成四年十月一日 発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷所 ㈱小森製本印刷

東京都千代田区飯田橋一十一一六

発行所 法然上人鑽仰会

電話〇三三三六二五九四四

〒二〇二（振替）東京八一八二一八七

ことわざで読む仏教文化の華！

だれもが知っていることわざからの仏教入門の手引

仏教ことわざ辞典

勝崎 裕彦 著

■読みやすい愛蔵版——定価8000円(税込)

A5判・上製クロス装・函入

本文約三〇〇ページ 10ポイント2段組

●挨拶の冒頭、法話の導入部に、文書布教にと、さ
まざまに活用できる座右の書。

●視力の衰えた中高年の方におすすめします。

■ハンディな携帯版——定価2500円(税込)

四六判・上製カバー装

本文約三〇〇ページ 9ポイント2段組

●日本の伝統文化を知りたい人々に、また寺院から
檀信徒への施本に最適。

●一家に一冊、常備の書。

発行 溪水社

〒一〇二 東京都文京区後楽二一八―九
☎〇三(三八四)九六三一(振)東京七三三六六五

発売 北辰堂

〒一〇二 東京都文京区後楽二一八―九
☎〇三(三八二)八四九四(振)東京九一四三二四二

第五十八巻

九・十月号

昭和十年五月二十日 (第二種郵便物認可) 毎月一回一日発行
平成四年九月二十五日印刷 平成四年十月一日発行